小　林　耕　二　郎

Kobayashi Kojiro

2016

第４回多摩美術大学彫刻学科研究室企画展

動物と動物のあいだ

小林 耕二郎

2016 年 6 月 6 日（月）- 6 月 24 日（金）
多摩美術大学八王子キャンパス・彫刻棟ギャラリー

小林耕二郎

2003　多摩美術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
2001　金沢美術工芸大学美術学部彫刻学科卒業

個人　及び　アーティストユニット「構想計画所」としての主な活動

2016　個展「CONCAVE」　gallery COEXIST-TOKYO (東京)
2015「TAMABI AZOU SAI」　AKIBATAMABI21 (東京)
2014　個展「低地 | HOLLOW」　gallery COEXIST-TOKYO (東京)
2013「秘密の部屋　ヤドカリトーキョー vo.9」　旧外国人用簡易宿泊所 (東京)
「ART SESSION TUKUBA」　TX 研究学園前公園 (茨城)
2011　個展「FROW」　新宿眼科画廊 (東京)
「EN Project」　家の展示館 (東京)

「構想計画所」
2015「引込線 2015」　旧所沢市立第２学校給食センター (埼玉)
「第 18 回岡本太郎現代美術賞展」　川崎市岡本太郎美術館 (神奈川)
2014「疑存島 - 他者なき世界の地図作成法 -」　gallery COEXIST-TOKYO (東京)
「雑木林を巡る哲学と美術と出来事」　小平市中央公園雑木林 (東京)
2013「Impact8」　Duncan of Jordanstone College of Art ＆Design (イギリス)
「水源地の芸術 -Direct Access Method」　神奈川県立相模湖交流センター (神奈川)
2012「風・景・観　見逃した世界・ここにある世界」　アートラボはしもと (神奈川)

小林の表現を見れば、単に同時代的なメディアを駆使したイメージの表出や、安易な社会的メッセージではない事は明らかだが、彼の求めてやまない「CONCAVE」とは一体なんであろうか。点在する型取られた凹みと空洞、そして掘るという行為からは自ずと「彫刻」の構造としての表面と不可視の内部、つまり「闇」に関わる問題を喚起させる。「闇」は「光」の対義であり彫刻の表面（アウトライン）と内部（空洞）の連関とも置き換えられるだろう。小林はまず、この不可視の内部を造形し「闇」を顕在化させる。それは従来の彫刻の持つパラドクスを反転させることで顕れる純粋な彫刻的「現象」であり創造への根源的な衝動の「闇」を読み解く試みでもある。

彫刻学科教授　水上嘉久

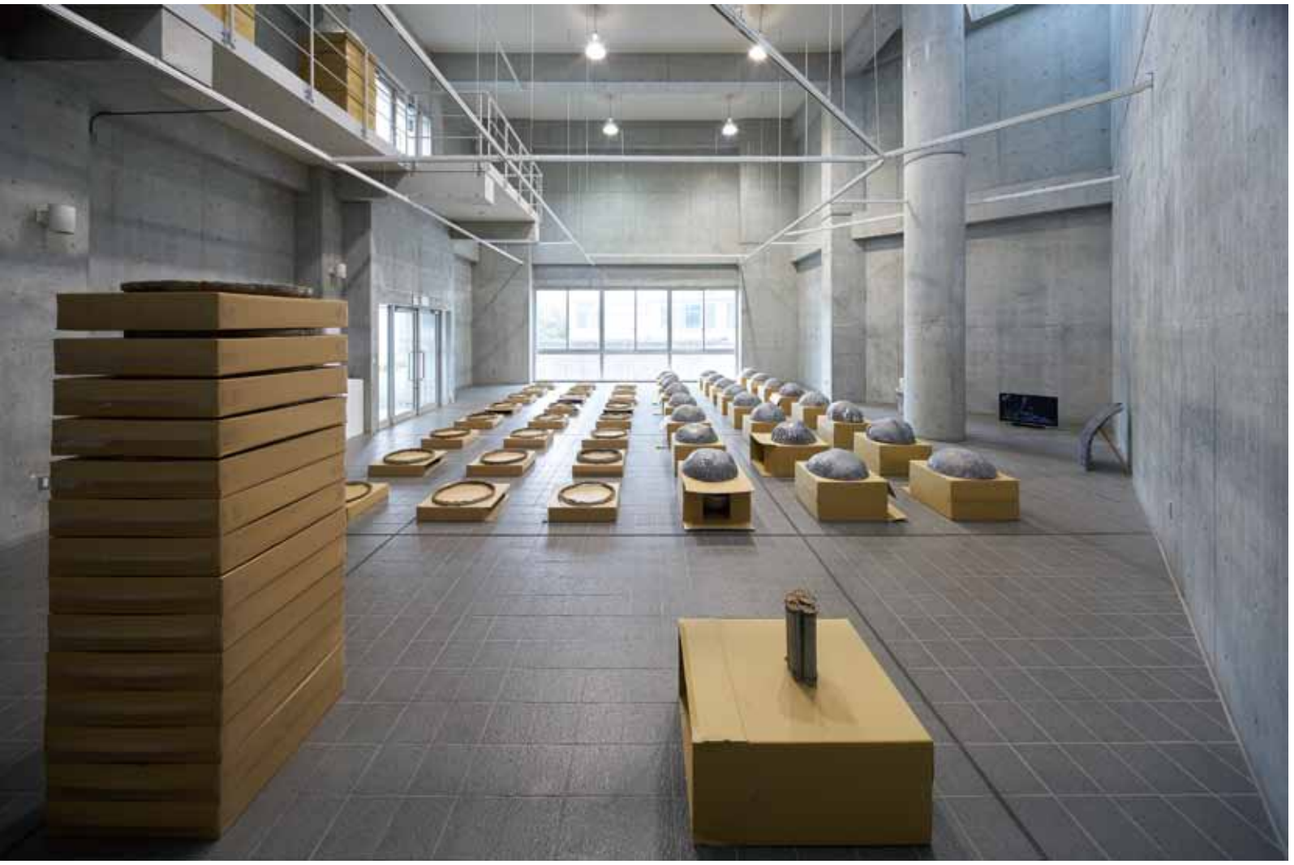
動物それぞれの主体が知覚するものはすべてその知覚世界になり、作用するものはすべてその作用世界になる。知覚世界と作用世界が連れだって環世界という一つの完結した全体をつくりあげている。つまりすべての生物が一つの世界のなかに置かれているようなことはない。すべての生物はバラバラな時間と空間を生きている。つまりそこには理解や制御などはない。人間を動物を超えるものではなく、動物と動物との間のメタ動物として捉え、複数の環世界を行き来できる能力を環世界パラメーターとして捉える。人間は一つの環世界にとどまることが出来ない。もしくは、人間は動物に比べて比較的容易に環世界を移動する。しかし動物も環世界を移動することもありえる。例えば犬は、盲導犬として人間に近い環世界を獲得しえもする。犬のように、〈とらわれ〉てみる。穴を掘ること、その行為を糸口として。巣穴=シェルターをつくるために穴を掘り、何かを保存するために穴を掘る。そしてその穴から動きまわってみる。

小林耕二郎

参照　：生物から見た世界　ユクスキュル・クリサート　岩波文庫
暇と退屈の倫理学　國分功一郎　大田出版
協力　：島津こころ　gallery COEXIST-TOKYO

撮影　：若林勇人

発行：多摩美術大学彫刻学科研究室



動物と動物のあいだ
Space size：17.5×13.2×h8.2 m
鉛・セメント・石膏・土・段ボール・映像など
2016